

福田典子

(信州大)

目的 教育現場において、しばしば児童の衣服着脱技術の不足が指摘されている。これまでの着脱に関する発達の研究においては、衣服を身に纏うのみの技術段階を対象としているため、その自立時期を就学前として扱われている場合が多いが、着用後に衣服を整えて着る技術は就学後さらに発達するものと思われる。整え技術の自立時期に関して、これまでに調査した例は少なく、不明な点が多い。そこで本研究では、児童を対象とした着方指導に関する基礎資料として、着脱技術の発達の变化を明らかにすることを目的とした。

方法 調査対象は、沖縄県の幼稚園児及び小学生(3歳から9歳)318名、男児161名、女児157名とした。調査方法は、クラス担任を介して調査票を父母へ依頼回収した。回収率は84.8%であった。調査時期は平成10年2月であった。調査内容は、①衣服の基本的な着脱技術の達成度②衣服の整え技術の達成度③環境や活動に適した着方技術の達成度④脱衣の管理技術の達成度を中心とし、各技術の自立時期、性差及び年齢差の影響を中心に比較検討を行った。

結果 ①衣服の基本的着脱技術および②整え技術については、いずれの技術に関しても、1%の危険率で性差および年齢差が認められた。自立時期は技術の難易度によって異なったが、特に「シャツの襟の整え」は自立時期が遅いことが明らかとなった。③活動環境や活動状況に適した着方技術および④脱衣管理技術については、技術によって性や年齢の影響は異なった。整え技術は基本的着脱技術に比べて、男児は女児に比べて自立時期が遅いこと。脱衣管理技術は達成度が低く、発達の顕著な変化も認められないことがわかった。